様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｈ００６０６

研究課題名（和文）現代若者の再帰的ライフスタイルの諸類型とその成立条件の解明

研究課題名（英文）Examination of the types of reflexive life styles of contemporary young people and their determining conditions

研究代表者
浅野　智彦（Asano, Tomohiko）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：００２６２２２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　33,900,000円

研究成果の概要（和文）：16歳から29歳の男女を対象として代表性を考慮したサンプリングを行い、行動と価値観についての調査を行った。また合わせて追跡調査として、30代から50代の男女についても同様の調査を行った。調査は、二つの部分に分かれる。一つは東京都杉並区と神戸市灘区・東灘区を対象範囲として行われた（都市部調査）。もう一つは、全国を対象範囲として行われた（全国調査）。都市部調査は、1992年以来10年ごとに科研費の補助を得て行なってきたものの最新版であり、4回目となる。これによりコーホート間の違い、コーホート内の変化を正確に推測でき、特に都市部に住む団塊ジュニア世代の意識と行動の特性について新しい知見を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的な意義は、若者のライフスタイル（自己意識・文化行動・親密性・社会意識・価値観等）に再帰性がどのように浸透し、彼らの生活や意識をどのように変えつつあるのか明らかにした点にある。具体的には、第一に、1992年以来10年ごとに行ってきた都市部調査により、コーホート間の変化（世代効果）とコーホート内の変化（年齢効果）を総体として捉えていること。第二に、都市部調査と合わせて全国調査を行い、都市部調査で確認された知見をふまえてより一般化可能な知見を得たこと。このことから本研究は、若者と社会との関係を再構築する上で有用な政策的示唆を与えるという意味で社会的な意義をも有する。

研究成果の概要（英文）：Our research sampled respondents aged from 16 to 19 in non-biased manner, asking them to answer questions on their everyday life and opinions in a questionnaire. The project is consisted of two parts, one of which is focused on youth in Tokyo, Suginami ward and Kobe, Nada and Higashi-Nada ward (urban research), the other on youth nationwide (national research). The urban research, the fourth study in a time series conducted every 10 years since 1992, allows us to analyze and estimate the differences between birth cohorts on the one hand, and the changes through the life course within each cohort on the other hand. This analysis reveals that the "Dankai junior" generation differs significantly from common perceptions.

研究分野：社会学

キーワード：若者　文化　親密性　自己意識　社会意識　メディア利用　世代効果　年齢効果

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

20 世紀中盤以降の先進諸社会の変化を社会学者はしばしば「再帰性」によって特徴づけてきた。伝統的な文脈の無関連化(「脱埋め込み」)、近代的個人を背後から支えてきた中間集団の力の弱まり(「個人化」)、それにともなう社会の諸枠組みの溶解(「液状化」)等々。これらは情報化の進展ともあいまって急速に個人の生き方を変容させた。すなわちその都度の状況に応じて自己のあり方を再検討し、それによって不断に軌道修正していく生活様式、いわば「再帰的ライフスタイル」である。

このような再帰的なライフスタイルを最初に実践するのはそれぞれの社会の若者たちである。日本では 1970 年代以降、若者文化が社会学の重要なテーマであり続けてきたが、各世代の若者文化をつらぬく変化は、再帰的ライフスタイルの拡大と深化の過程として読み解くことができる。若者は、社会全体の再帰性が増進していく際のいわば前線を形成しているといってよい。

このことは同時に若者と社会との関係を組織し直すという今日の実践的な課題とも直接に関係している。近年、選挙権年齢の 18 歳引下げをはじめ、若者の社会的・政治的な参加の促進が喫緊の課題となっている。少子化により急速に規模を縮小しつつある若い人々をこの社会にどのように市民として迎え入れるのかについてこれまで以上に工夫が必要である。そのような工夫をするにあたって当事者たる若者のライフスタイルを考慮することはきわめて重要である。

今世紀に入って以降、若者についての社会学的研究は基本的に労働および学校から労働への移行過程に関係するものに集中してきた。他方で彼らのライフスタイル全体の変化に注目した研究はあまり多くはない。この研究を進める際に踏まえるべき背景は以上のようなものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、上記のような社会の再帰化が若者の行動や意識、価値観にもたらす変化を明らかにすることだ。変化を見るためには時を隔てた 2 つ以上のデータセットによる比較が必要となる。申請者はすでに 1992 年から 10 年ごとに科研費を得て行ってきた調査データを保有している。これを比較の準拠点とすることで 30 年間の変化をあきらかにすることができる。

ただしこれまでの調査は限定された地域（東京都杉並区・神戸市灘区東灘区）において行われてきたものであり、一般化可能性に一定の限界が課せられている。再帰性のように社会全体におよぶ大きな変化について検討する場合には、全国調査のほうが望ましい。そこで都市部の調査と並行して全国調査を行う。

さらに変化を世代間の違い、世代内の変化という 2 つの効果に分解して見るためには、かつて調査対象だった年齢層の人々を中年になった時点で調査する必要がある。上記 2 種類の若者調査を補足する形で都市部・全国の中高年（30 代から 50 代）を対象とした追跡調査を行う。

３．研究の方法

本研究は、代表性のある標本に対する調査紙調査の実施とそこから得られたデータセットを分析することによって進められる。以下に調査のデザインを記す。

調査の母集団ごとに区分すると本研究は以下の 4 つの調査を実施したことになる。

（1）　都市部若者調査：東京都杉並区、神戸市灘区東灘区在住の 16 歳から 29 歳の男女を母集団として、住民基本台帳を用いた系統抽出によって回答者を選びだした。
（2）　都市部中高年調査：東京都杉並区、神戸市灘区東灘区在住の 30 歳から 59 歳の男女を母集団として、住民基本台帳を用いた系統抽出によって回答者を選びだした。
（3）　全国若者調査：全国の 16 歳から 29 歳の男女を母集団として、住民基本台帳を用いた系統抽出によって回答者を選びだした。
（4）　全国中高年調査：全国の 30 歳から 59 歳の男女を母集団として、住民基本台帳を用いた系統抽出によって回答者を選びだした。

調査に用いた質問項目は都市部若者調査と全国若者調査は同じものであり、1992 年以降用いているものと多くの項目が共通している。他方、若者調査と都市部中高年調査・全国中高年調査とは一部異なっている（年齢やライフステージを加味したため）。

具体的には、若者のライフスタイルを構成すると考えられる 6 つの主要な領域に焦点を合わせて質問項目を作成した。すなわち自己意識に関わる領域、友人関係に関わる領域、家族・恋愛など親密性に関わる領域、メディアの利用に関わる領域、趣味活動など文化活動に関する領域、社会観・価値意識などに関する領域がそれだ。

上記 4 つのデータセットは以下のように組み合わせることで時間軸・空間軸を考慮した複合的な分析が可能になる。

まず都市部若者調査を既存の（1992 年から 2012 年の）データセットとプールすることで若年層の行動・意識の時系列の変化を捉えることができる。またそこに都市部中高年調査（これは 2012 年にも実施しているのでこれも含わせて）を加えることで出生コーホート（世代）間の差

異を年齢層ごとにみることができる。

次に都市部若者調査を全国若者調査と合わせて分析することで、これまで行ってきた都市部調査が全国のデータと比較してどのような特徴を持つのかを確認することができる。加えて全国中高年調査のデータも合わせることで、年齢層による違いを検討することができる。

４．研究成果

調査結果の単純集計については研究プロジェクトのウェブサイトに PDF にて公開している（http://jysg.jp/research.html）。またデータの詳細な分析結果についても同じサイトに報告書（pdf 形式）として公開している（http://jysg.jp/img/JYSG2022researchreport.pdf）。したがって詳細はそちらを参照していただきたい。

ここではプロジェクトの中核をなす世代間変化について得られた認識を記述する。特に 1992 年以来の一連の調査においてつねに対象に組み込まれていたのは 1973 年から 1982 年の間に生まれた人びとであり、のちに団塊ジュニア、就職氷河期世代、ロスジェネなどと呼ばれる世代である。したがってこの調査ははからずもこの世代の変化を 10 年ごとに 10 代から 40 代まで追跡するものとなっている。それゆえこの世代に軸足をおいて得られた結果を要約する（図表参照）。

まずロスジェネについて指摘できるのは、従来描かれがちであったようなイメージはデータによって支持されないということだ。彼らは、自分に対して否定的であり、自己アイデンティティを確立できず、どこか別のところにほんとうの自分を空想して現実から逃避し、孤独の中で「無敵の人」となる、等々といわれてきたが、これらの記述はいずれもデータによって否定される。彼らは 20 代において自分を好きである度合いが他の世代よりも高く（他の年齢層では他の世代とかわらず）、後続世代よりも自分らしさを強く保持しており、別の自分を夢想する傾向も強いわけではなく、孤独感を強く感じているわけでもない。彼らを、救済的な観点からにせよ、リスク管理的な観点からにせよ、過剰に否定的に描き出すことには注意深くなければならない。

次に、ロスジェネ世代との対比において他の世代についていえるのは、ここで確認した多くの質問項目について、新しい世代ほどその傾向を強めているということだ。すなわち先行世代に比べると後続世代において現状肯定が強まり、自分らしさが弱まり、多元性が高まっていくという一貫した傾向を見て取ることができる。したがってこれを 30 年間の大きな意識の変化の方向とみなすことができる。

他方、このような傾向から乖離する動きを示しているのがミレニアル世代だ。ミレニアル世代は 10 代あるいは 20 代においてではあるが、その前後の世代に比べて自己啓発的態度が強く、孤独感が高い。世代論あるいは若者論の中であまり話題になることのなかったミレニアル世代であるが（「ミレニアル世代」という言葉自体あまり広くは使われていない）、その固有の特徴に注意を向けておく必要がある。

最後に指摘しておくべきは、世代間の違いが 10 代、20 代において多く見られることだろう。30 代では世代差は確認されず、40 代で確認される世代差は、「自分がどんな人間かわからなくなる」「自分には自分らしさというものがあると思う」の 2 つだけだ。とするとここまで取り出してきた世代の違い（世代効果）は、特定の年齢層においてのみ観察されるという意味で、年齢層の違い（年齢効果）をも示しているといえる。本研究は全体として世代効果と年齢効果とに注目するのであるが、それに加えて世代効果の年齢効果にも注意を払うべきであることを以上のことは教えている。

	10代	20代	30代	40代
q1 あなたは今の自分が好きですか。それとも嫌いですか。	n.s.	新人類＜ロスジェネ*、ロスジェネ＞ミレニアル*	n.s.	n.s.
q2 場面によってでてくる自分というものは違う	n.s.	新人類＜ミレニアル*、新人類＜Z前半***、ロスジェネ＜Z前半**	n.s.	n.s.
q3 自分がどんな人間かわからなくなることがある	n.s.	新人類＜Z前半**	n.s.	新人類＜ロスジェネ***
q4 他人からみると，私は好みや考え方にまとまりがない人間のようだ	n.s.	n.s.		
q5 意識して自分を使い分けている	n.s.	ロスジェネ＜ミレニアル***、ミレニアル＜Z前半*、ロスジェネ＜Z前半***	n.s.	n.s.
q6 今のままの自分でいいと思う	ミレニアル＜Z後半***、Z前半＜Z後半*	ロスジェネ＜Z前半***、ミレニアル＜Z前半***		
q7 どこかに今の自分とは違う本当の自分がある	n.s.	n.s.		
q8 自分の中には、うわべだけの演技をしているような部分がある	n.s.	ロスジェネ＜ミレニアル***	n.s.	n.s.
q9 仲のよい友人でも私のことをわかっていない	n.s.	n.s.		
q10 自分には自分らしさというものがあると思う	ロスジェネ＞Z前半***、ロスジェネ＞Z後半**、ミレニアル＞Z前半*	新人類＞ロスジェネ***、新人類＞ミレニアル***、新人類＞Z前半***、ロスジェネ＞ミレニアル***、ロスジェネ＞Z前半***	n.s.	新人類＞ロスジェネ**
q11 どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切だ	ロスジェネ＞ミレニアル**、ロスジェネ＞Z前半*	新人類＞ロスジェネ***、新人類＞ミレニアル***、新人類＞Z前半***、ロスジェネ＞ミレニアル**		
q12 なりたい自分になるために努力することが大切だ	ミレニアル＜Z後半*	ロスジェネ＜ミレニアル***、ミレニアル＞Z後半**	n.s.	n.s.
q13 ひとりでいると孤独を感じる	ミレニアル＞Z後半*	ミレニアル＞Z前半*	n.s.	n.s.
q14 大切なことを決めるときに，自分の中に複数の基準があって困ることがある	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

図表

* <.05 ** <.01 ** <.001 空欄は質問項目・コーホート数の関係で比較ができないもの

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 木島由晶	４．巻 56-2
２．論文標題 現代日本の大学生と音楽の好み	５．発行年 2022年
３．雑誌名 社会学論集（桃山学院大学社会学会）	６．最初と最後の頁 41-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木村絵里子	４．巻 102
２．論文標題 大学生のソーシャルメディア利用の規定要因――Twitter，Instagram，TikTokに着目して	５．発行年 2023年
３．雑誌名 メディア研究	６．最初と最後の頁 21-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 羽渕一代	４．巻 102
２．論文標題 マッチングアプリ利用の現在――アーリーアダプタの属性とその傾向	５．発行年 2023年
３．雑誌名 メディア研究	６．最初と最後の頁 5-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 浅野智彦	４．巻 73
２．論文標題 大学生における自己の多元化とその規定要因	５．発行年 2022年
３．雑誌名 東京学芸大学紀要．人文社会科学系．II	６．最初と最後の頁 119 - 133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 木村絵里子	４．巻 49
２．論文標題 『non-no』の恋愛文化――現在を対象化するために	５．発行年 2021年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 91-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 木村絵里子
２．発表標題 インスタが写すもの　ガールズメディアの系譜と文化
３．学会等名 日本メディア学会2022年春季大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 妹尾麻美・木村絵里子
２．発表標題 大学生の生活と意識2020（１）――親学歴は子の大学ランクに影響を与えるのか？
３．学会等名 日本社会学会第94回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 牧野智和
２．発表標題 大学生の生活と意識2020（２）――再帰性はアイデンティティ資本になりうるのか？
３．学会等名 日本社会学会第94回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 寺地幹人
２．発表標題 大学生の生活と意識2020（３）――「努力」のコスパを重視するのはどのような大学生か？
３．学会等名 日本社会学会第94回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 木島由晶
２．発表標題 大学生の生活と意識2020（４）――趣味は情報選択に違いをもたらすのか？
３．学会等名 日本社会学会第94回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 二方龍紀
２．発表標題 大学生の生活と意識2020（5）「メディアの再帰的利用」を行うのは、どんな大学生か？
３．学会等名 日本社会学会第94回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 小川豊武
２．発表標題 大学生の生活と意識2020（６）――再帰的な友人関係は「濃密」で「希薄」か？
３．学会等名 日本社会学会第94回大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

http://jysg.jp/
青少年研究会

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	辻　泉 (tsuji izumi) (00368846)	中央大学・文学部・教授 (32641)	
研究分担者	牧野　智和 (makino tomokazu) (00508244)	大妻女子大学・人間関係学部・教授 (32604)	
研究分担者	二方　龍紀 (futakata riki) (20722549)	常磐大学・人間科学部・准教授 (32103)	
研究分担者	久保田　裕之 (kubota hiroyuki) (40585808)	日本大学・文理学部・教授 (32665)	
研究分担者	岩田　考 (iwata kou) (60441101)	桃山学院大学・社会学部・教授 (34426)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	木村　絵里子 (kimura eriko) (60710407)	日本女子大学・人間社会学部・助教 (32670)	
研究分担者	妹尾　麻美 (seno asami) (60802064)	追手門学院大学・社会学部・准教授 (34415)	
研究分担者	羽渕　一代 (habuchi ichiyo) (70333474)	弘前大学・人文社会科学部・教授 (11101)	
研究分担者	木島　由晶 (kijima yoshimasa) (80513176)	桃山学院大学・社会学部・准教授 (34426)	
研究分担者	小川　豊武 (ogawa tomu) (80796079)	日本大学・文理学部・准教授 (32665)	
研究分担者	寺地　幹人 (terachi mikito) (90636169)	茨城大学・人文社会科学部・准教授 (12101)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関